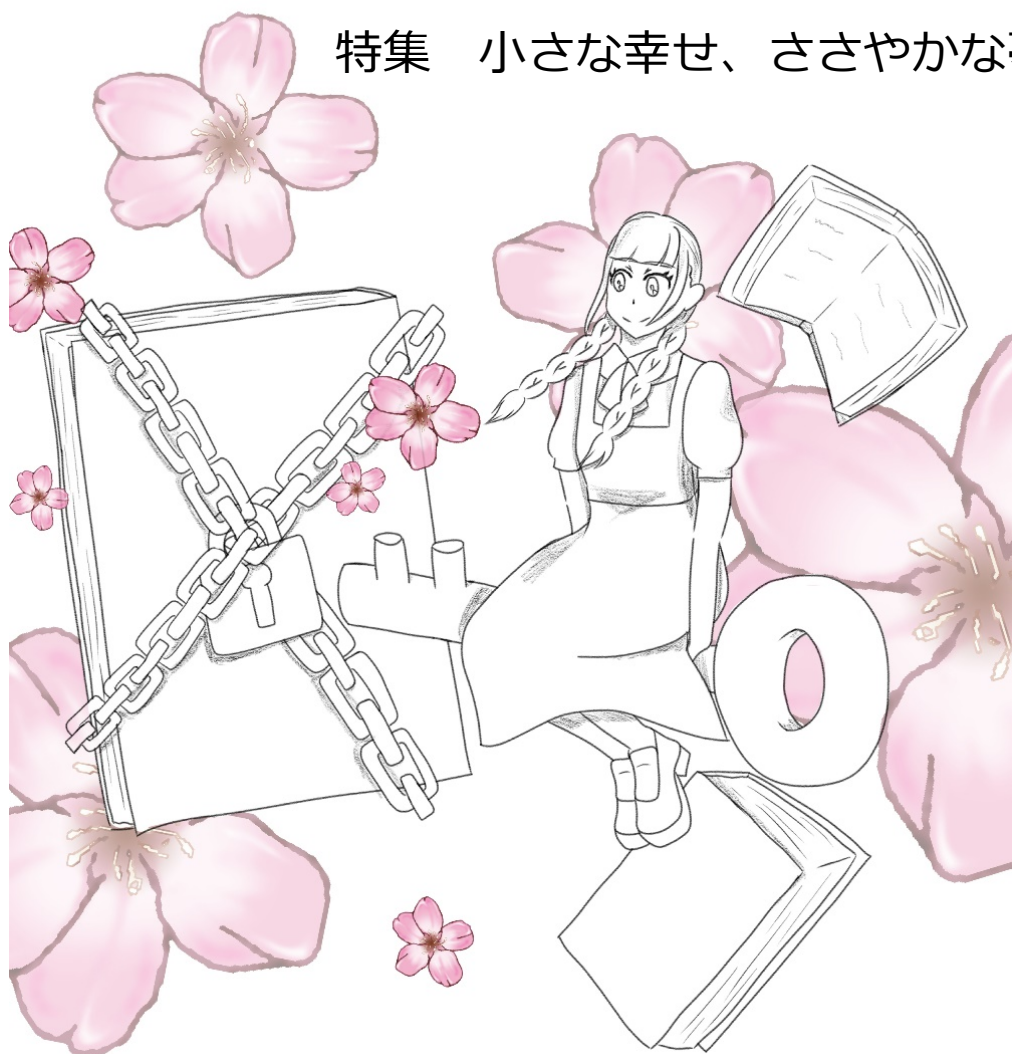


どこでもドアのかぎ 2021

特集 小さな幸せ、ささやかな夢



新潟県立大学

2020 年度卒業 / 2021 年度入学記念



どこでもドアのかぎ 2021 目次

石川 伊織	(国際地域学部 国際地域学科)	3
福嶋 秩子	(副理事長)	9
小谷 一明	(国際地域学部 国際地域学科)	12
荒木 和華子.....	(国際地域学部 国際地域学科)	17
黒田 俊郎	(副学長／国際地域学部 国際地域学科)	23
小澤 薫	(人間生活学部 子ども学科)	24

特集「小さな幸せ、ささやかな夢」

石川 伊織	(国際地域学部 国際地域学科)	26
小谷 一明	(国際地域学部 国際地域学科)	27
堀江 薫	(国際地域学部 国際地域学科)	29
水上 則子	(国際地域学部 国際地域学科)	30

大学論 ickに教え、ickに学ぶか

大塚英志

講談社・講談社現代新書 2043(2010)

マンガ家とアニメーターを養成する大学の学部で、設立段階からかわり、その大学の教員となった著者が、第一期生を卒業させるまでの顛末。日本のマンガが映画の手法を取り入れて発展してきたという、著者のマンガ理論も面白いし、これを戦前の国策映画に始まる伝統だという歴史的な分析も興味深いけれど、圧巻は、大塚が筑波大学での彼の指導教授だった民俗学者・千葉徳爾（1916-2001）の授業についての話です。

千葉がそのまた先生に当たる柳田国男から受けた教えは「発見すること」で、千葉が自分で発見するまで、柳田は大量の資料を与えて度重なる調査旅行を課すのだけれど、何も「教えない」のです。千葉もそれを受け継いで、何も「教えない」！ ひたすら学生が発見するまで材料を与え続けるのです。大塚は、マンガが好きならちょっと絵がうまい程度の学生を、「マンガ家」に育て上げるために、いろいろと過酷な課題を与えます。「マンガと映画は影響し合っているのだ」と教えるのではなく、映画をマンガのネームに書き直させたり、マンガから映画を撮らせりします。自分で使える技法として、理論を「体験する」まで、理論を「教え」たりはしないのです。

大塚は、こう言う授業ができるのが「大学」なのだ、と言います。理論を体験するには、効率的な学習などあり得ません。ひたすら、師匠のやっているのと同じ作業を繰り返して、自分で発見することです。だから、師匠は自分の背中を見せているだけで、教えたりなどしません。だから、「弟子」などいないのです。何しろ先生は何も教えてないのですから。

そういう先生になりたいなあ、というのが私の望みです。

ウンコはどこから来て、どこへ行くのか

湯澤規子

筑摩書房・ちくま新書 1523(2020)

ウンコを不要なものとするなら、そりゃ「汚物」でしょうが、ウンコしない人はいないので、これをどうにかするしかない。で、汚いものは見えないところに遣ってしまおうというのが近代社会で、だから、水洗トイレで流したりしちゃうのですね。でも著者はウンコは資源だと言います。江戸時代には、お金で取引されてたんだと言います。湯澤先生これを学問にしちゃいました。さすが法政大学！！

湯澤先生のおっしゃるウンコ商売は 1945 年ころまでは続いていて、このウンコを都心から多摩や埼玉にかけての農村に運んでいたのが、今では特急列車が走っている西武池袋線でした。元の名前は「西武農業鉄道」。ここでいう「農業」はウンコのことです。この手の話は徳富蘆花が『みみずのたはごと』という随筆中にも書いています。お前だって 30 年前に法政で非常勤講師してたろうと言われるとの通りで、自画自賛なんだけれど、あの頃から法政大学にはヘンな先生はたくさんいましたね。

そのもう一人のヘンな先生は、工学部にいらしたカ石先生という統計学の先生でした。近年になってこのウンコを水洗トイレで流すようになると、実は別の問題が起きてくるのです。水洗で流されたウンコはどこへ行くかという、そのまま下水道で下水処理場に行くのですね。ところが、日本の下水道は雨水も一緒に流すので、大雨が降ると、下水処理場の処理能力を超えてしまいます。で、下水処理場はどう対処するか？ 処理しないで海に流すのですね！！ したがって、下水道が完備されると、大雨の度に海が汚れるのです。東京湾の赤潮というのがこれです。雨とウンコと下水処理場の関係を指摘して、東京都に下水道の改革を提言していたのがカ石先生でした。こういうウンコ話をまじめに学問にしちゃうのが、カ石先生や湯澤先生みたいな人のすごいところなんです。

ところで、カ石先生にはもう一つ別の武勇伝があるのですが、それはまた別の機会に。

水都 東京——地形と歴史で読みとく 下町・山の手・郊外

陣内秀信

筑摩書房・ちくま新書 1520(2020)

下水道のついでに水のお話。そういえば著者の陣内先生も法政の先生でした。この人はベネツィアへ留学して、都市景観の保存を勉強してきたのですが、帰国した先生が気づいたのが、隅田川周辺はベネツィア同様の水の町だということでした。ここから研究をはじめた先生は、最近では多摩川をめぐる郊外の水辺の研究をされています。その成果がこの本です。

多摩川というと、陣内先生も引用していますが、実はものすごい名著が 1960 年代末に出版されています。貝塚爽平の『東京の自然史』という本です。私の高校の地学の授業は、教科書はそっちのけで、竹内均の『地球の科学』と貝塚爽平の『東京の自然史』だけ読むというものでした。当然、受験の役になんか立ちません。というか、受験の役に立つようなどうでもいい授業を高校で受けた覚えは、私にはありませんけどね。当時の地学の教科書には、岩石と地質と地層と天体の話しか出てませんでした。ところが、『地球の科学』は、今は通説になっている大陸移動説を初めて一般向けに紹介した本でした。要するに、うちの高校の先生は最先端の学問の紹介を受験そっちのけでやってたのですね。一方、『東京の自然史』は、多摩川の段丘と富士山の噴火と火山灰について極めて体系的に叙述した名著でした。プラタモリで出てきた東京郊外の水の話のネタは、実に 60 年前のこの本にすでに書かれていたのですね。

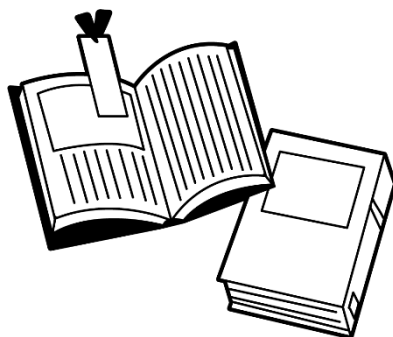
で、『水都 東京』です。江戸を支えていたのは、一方では、江戸の東への拡大のための埋め立て（もちろんその資材は江戸の町から出るごみであり、汚物です。ここでウンコとつながってくるのですね）と隅田川の水運で発展する本所・両国ですが、もう一方は、江戸の町へと飲料水を供給する多摩川と玉川上水でした。江戸の町はこの二つの水系で成り立っていて、この構造は、江戸時代はもちろんですが、新宿にあった淀橋浄水場が閉鎖・移転させられて、跡地に副都心建設される 1960 年代まで、ずっと続いていたのです。江戸時代は、私たちがごく近くにあるのです（この辺の事情は、堀越正雄『江戸・東京水道史』講談社学術文庫（2020）を参照してください）。

新潟も、東京に勝るとも劣らない水都です。東堀・西堀の掘割が埋め立てられていなければ、新潟はヴェネツィアみたいな水の町だったはずですよ。誰か『水都 新潟』っていう本を書かないかなあ。

古地図で見る京都 『延喜式』 から近代地図まで

金田章裕
平凡社(2016)

以前の [アカデミック・リテラシーII] という授業で、鴨長明の『方丈記』を読んだ際に、私はこの本を、平安末期から鎌倉初期に現れた希代の「災害文学」だ、と紹介しました。しかし、読み進めていくうちにとても困ったことが起きました。長明が書いている火事や突風の記録は、当然のことですが当時の地名で書かれています。そうすると、それが今のどこに当たるのかを考えないといけません。ところが、平安末期の地図を探すのはとてもむづかしいのです。そもそも、御所はどこにあったのか？ 長明の「朱雀門が焼けた」という記述は、平安初期からあった古い内裏の朱雀門のことで、今は西陣の一角に石碑が立っているだけです。皇居が焼けて、天皇はどこへ行ったのか？ 今の京都御所はいつからあそこにあのようにして存在してるのか？ 実は素人にはわからないことだらけです。古典を読もうとするなら、どうしても古い地図が必要なんです。この本はぜひおすすめの一冊です。



ロマネスクとは何か——石とぶどうの精神史

酒井健

筑摩書房・ちくま新書 1525(2020)

ここ数年、ドイツの哲学者ヘーゲルの美学講義の研究をしています。若いころのヘーゲルは当時流行のロマン主義を徹底的に批判しているのですが、芸術について語るヘーゲルの思考は、どう見てもロマン主義的なのです。しかし、そもそも「ロマン主義」って何だ？

これは、中世末期から近代の初期にかけて、ロマンス語で書かれた散文作品を指して「ロマン」と言っていたのを、のちの学者が概念化したものらしいのです。ゲーテやらヘーゲルやら、あるいは19世紀初頭のロマン派の芸術家や理論家が挙げている例でいうと、具体的にはセルバンテスの『ドン・キホーテ』やら、ボッカチオの『デカメロン』などです。あれれっ、とは思いませんか？ 現代のドイツ語でいうと Roman というのは長編小説のことを指します。短編や中編は「物語」=Erzählungです。でも、もともとの意味は「ローマ風」ということではないのですか？ ところが、19世紀初頭の学者が挙げている「ロマン」のどこがローマ風なのでしょう？ その後のドイツ・ロマン派の小説群のどこがローマ風なのでしょう？

同じことは、建築様式について語られる「ロマネスク様式」も同様であったようです。本書の著者あとがきによれば、ローマっぽいけれどもローマではない何か、を指して「ロマネスク」と呼んだのだ、というのです。要するに、○○っぽいけれども○○そのものではない、というところが、本来の○○からの逸脱を言っているのですね。小説の話に戻せば、それまでの文学理論では、古典ギリシア・ローマの韻文しか文学扱いされなかったのに対して、ロマン派の文学者たちは、それ以後の散文作品だって文学だ、と言いたかったのでしょう。

しかし、その一方で、19世紀のロマン派は18世紀の啓蒙主義に対する反動という側面も持っています。近代化は、反理性主義の側面も含んでいるという困ったことになってきます。ちょうど、リベラルの反動でアメリカが今ポスト・トゥルースの時代にはまり込んでしまったみたいに。

ところで、純然たるローマ様式のまがい物であるロマネスク様式の後は、ゴシック様式が続きます。その反動がルネサンスの時代に現れます。ルネサンスは古典古代の復興ですから、ルネサンス様式というのは古代ギリシアの神殿を簡素にしたような、静謐でシンメトリーな構成を持ちます。合理主義の復興です。これが啓蒙主義にまでつながるわけですが、上記の反啓蒙のロマン主義は、その表れでもあるのです。今がどんなにひどい反理性主義の時代であったとしても、そのうち、ポスト・トゥルースの反動で合理主義が復興するはずで、このまま非合理主義で世界が維持できるとは到底考えられません。その証拠に、合理的に事実を突きつけることで、現代の主流派を形成している世代のおっさんたちに対して、若者世代の権利を突き付けている、グレタさんたちのような運動も出てきていますからね。そういうわけで、私としては合理主義の復興を、ゲリラ戦を展開しながら、首を長くして待ちたいと思うわけです。それまで生きていられるといいのですがね。死んだ後でもゲリラ戦ができるように、論文という名の紙の爆弾を作り続けます。

声の物語

クリスティーナ・ダルチャー、市田泉訳
早川書房(2019)

ポスト・トゥルースつながりでもう一つ紹介しましょう。『声の物語』は、大統領の強制的な政策のもと、すべての女性に手首に、一日 100 語以上をしゃべると強い電流が流れるカウンターがとりつけられてしまうというディストピア小説です。アメリカの女性たちから言葉が奪われてしまい、女性の日常生活に大きな不利益が生じてしまいます。

なぜ、女性はしゃべってはならないのか？ やい！ 森！ 答えろ！！ というわけです。物語では、物理的な装置によって女性の身体に危害が加えられます。では、今回の森君の差別発言の場合はどうでしょうか？ 日本では、物理的に身体に危害を加えるようなし方で黙ることが強制されるのではなく、自発的に黙っているように仕向けられるのです。責任ある役職にありながら、にもかかわらず空気を読んで黙っている女性が、「わきまえた」人だというわけです。しかし、それは責任ある仕事をしてはいけない、ということと同義です。女性はお飾りだ、ということでしょう。

しかし、こういう発言に対して沈黙しているのは、それに賛成したということです。JOC の会議の席上で冷笑していた連中も、黙っていた連中も、みな同罪です。しかも、この人たちは執行部の提案に対して、「わきまえない女性たち」のように発言したりはしなかったので、会議が長引かないで終わっていたわけですから、実はこの「わきまえのある男たち」は、いてもいなくても会議が成り立つ人たちだった、ということでもあります。つまり、黙ってる女をお飾りとして必要とする男の親分のもとで、そういう男の子分となって尻尾を振っている男たちもまた、いなくてもいいお飾りに過ぎなかったわけです。彼らは、発言する女性を嘲笑することで、発言しない自分たちが無価値であることを自ら立証したわけです。だから、わきまえもなくしゃべり続けましょう。「お黙り！」と言われるのを勲章だと思きましょう。黙れと言われて黙らないところに、わきまえない人間の誇りがあります。

さて、ダルチャーの『声の物語』はどのように展開するのでしょうか。まずは作品を読んでください。少し元気になれます。ついでながら、マーガレット・アトウッドの『侍女の物語』（齋藤英治訳 早川書房）もおすすめ。女性と言葉の関係を考えるには良い作品群です。

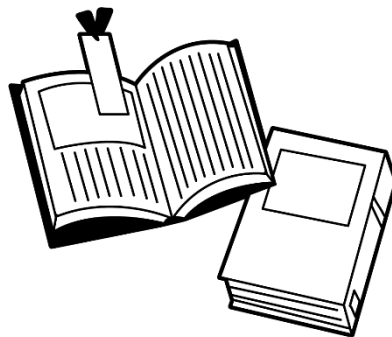
副理事長 福嶋 秩子

カササギ殺人事件 上・下

アンソニー・ホロヴィッツ
創元推理文庫(2018)

アガサ・クリスティの推理小説がお好きな方におすすめの本です。作者のアンソニー・ホロヴィッツが第二次世界大戦中のイギリスを舞台にしたドラマ「刑事フォイル」(NHK BS で放送)の脚本家だと知っていたことと、この本がミステリー関係の賞をとっていたことから、店頭で手にとり、一気に読んでしまいました。この本の特徴は、何と言っても、劇中劇ならぬ、小説中にもう一つ別の小説がそっくり入っているということです。一粒で二度おいしい(古すぎますか?!)作品です。現代のイギリスを舞台に起こる殺人事件と、クリスティに描かれた時代(1950年代?)に起こる殺人事件がどうからんでくるのか、そこはネタバレになるので書けません。興味をもった人はぜひ読んでみてください。

なお、この原作 Magpie Murders、そしてまだ訳本の出ていない続編の Moonflower Murders、さらに、脚本家ホロヴィッツ自らが作品中に探偵として登場する The Word is Murder (邦訳『メインテーマは殺人』)、The Sentence is Death (邦訳『その裁きは死』)はいずれも SALC にあります。読みやすい英語ですので、ぜひチャレンジしてみてください。



女の子はどう生きるか 教えて、上野先生！

上野千鶴子
岩波ジュニア新書(2020)

『君たちはどう生きるか』というベストセラーになった本がありますが、そこで「君たち」と呼びかけられているのは男の子でした。釈然としなかった上野先生は、「女の子はどう生きるか」というテーマで、自ら本を書くことにしました。前書きの副題に「女の子の翼を折らないように」というマララ・ユスフザイのお父さんのことばが引用されています。現代の日本社会は、今でも、女の子が羽ばたこうとしたときに、それを妨げているのではないですか、ということです。内容は、学校、家庭、性、社会の順に、女の子の質問に上野先生がわかりやすく答える形式になっています。実態や変遷を示すグラフや数字が示され、現在進行形の問題についても解説がされています。

巻末には、話題になった上野先生の2019年度東京大学学部入学式辞も採録されています。東大は今も女子学生が2割を越えていないということを知ったときはショックでした。50年前は1割でした。50年間で倍にもなっていないということは、医学部入試で女子や浪人に対して差別があったのと同じ構造や偏見があるのだらうと思います。「女の子が東大をめざさなくても」「女の子が浪人なんて」・・・まだこんなことばを言われる女の子がいるのではないのでしょうか。

東京オリンピック・パラリンピック組織委員会前会長の森さんの女性蔑視発言が問題になった今こそ、性別に関係なく読んでほしい本です。

英語独習法

今井むつみ
岩波新書(2020)

認知心理学、発達心理学、言語心理学の研究者である今井むつみさんは読みやすい入門書をいくつも書いていらっしゃる、読んだことがあるのですが、英語学習についての新書を書かれたことを知り、手に取りました。期待通りの本でした。外国語学習でぶつかる一つの壁は語彙です。単語帳で日本語の意味を覚えただけでは、実際に使うことができません。特に英語は、一つの単語が様々な品詞として使われ、それぞれの品詞の意味と用法を学んでいく必要があるからです。ここで重要なのが、認知科学でいう「スキーマ」の習得です。語はそれぞれ使われる分野が違っていたり、特有の構文があったり、一緒によく使われる語があったりします。たくさんの用例を見ることでそういう共通のパターンが浮かびあがります。これがスキーマです。スキーマの習得を楽しみながら効率的に行うために、今井さんはオンラインツールを使うことを提唱します。あげられているのは、SkELL - examples and collocations for learners of English, WordNet—A Lexical Database for English, Corpus of Contemporary American English といったいわゆるコーパスです。まずは英英辞典を使い慣れることから始めて、それができるようになったら、上のツールを使ってみたらいかがでしょうか。

英文法再入門 10のハードルの飛び越え方

澤井康佑
中公新書(2020)

外国語学習のもう一つのネックは文法です。日本語と全く違う英語の文法を理解するためには、その言語の特徴を理解し、正しい方法と順番で学ぶべきだというのがこの本の著者の信念です。易から難に行くべきところ、そうならない、たとえば、不定詞・動名詞といった準動詞句→従属節ではなく、従属節→準動詞句が正しいということです。また、ゼロからの学習ではなく、今もっている知識を尊重しつつ、強化（新たな観点からの整理）が行われます。日本語の観点から英語の文を理解するのに、いわゆる5文型が有効なことはわかっていたつもりですが、その威力をとてわかりやすく実証してくれます。学びなおしをしたい人も、自分の英語理解を確認したい人も、ぜひ読んでみてください。

ナラ・レポート 津島佑子コレクション

津島佑子
人文書院

千年の時空を軽やかに天翔る小説『ナラ・レポート』(2004)。主な舞台は奈良の大仏、興福寺。父である太宰治の『津島』を軽く揶揄しつつ、説経節「身毒丸」(しんとくまる)を經由して、中世の数々の物語にもぐりこむ。奈良を訪れる機会があったら、この有名な公園で鹿を見て、北山十八間戸(きたやまじゅうはちけんこ)に立ち寄りたい。『黄金の夢の歌』もそうだが、すごい小説家だと思う。3.11の後に書かれた「ヒグマの静かな海」も好きだ。

隔離 増刷版

徳永進
岩波文庫

コロナウイルスで隔離という言葉が飛び交う今、繙きたい本(2018年に増補されて再版)。著者である徳永進の故郷、鳥取県の無癩県運動(県からハンセン病の患者を一掃しようという運動)に関する聞き書きをベースにして書かれた本。故郷を訪れたときの様子も描かれ、とても読みやすいエッセイ風の本だ。映画『小島(こじま)の春』でも窺えるように、医療関係者がこの運動を手伝い、刑事や警察が背後を固める。「お召し列車」は若桜線、伯備(はくび)線、因美線で山陽方面に向かい、護送車と船で「病者」を離島に隔離していった。「絶対隔離」という語が心にせまる。島に収容された人々は、子どもの頃をよく回想した。川のほとりで遊んだ思い出、山の柔らかな緑の色合いなど。昭和39年に里帰りが認められても、戻って来いと言えなかった家族の胸中も思いやられる。2019年、こうした家族への被害賠償を認める判決が出た。

海女たち

愛を抱かずしてどうして海に入られようか

許榮善
趙倫子・姜信子訳
新泉社

2020年6月、パンソリ上演のため訳者の趙倫子が新潟にやって来た。趙倫子はパンソリの鼓手。上演後に話しかけると、静かに微笑みながら翻訳エピソードを教えてくれた。濟州島の海女さんの来し方が詩となって生まれ出るとは。詩を苦手とする私にとってはブレイクスルーとなる、読者の理解を丁寧に導いてくれる本。海の中のことは全く知らないのに、長帯のような海藻、貝を採る小さな道具、息継ぎの独特な音など、どれも感嘆しながら読んだ。「海女のリャンさん」(同名タイトルの映画が本学図書館にある)まで登場する。台湾のシャマン・ラボガンに続いて現れた海の世界を教えてくれる大切な本。

嶽本あゆ美戯曲集「太平洋食堂」 太平洋食堂/彼の僧の娘—高代覚書

嶽本あゆ美
ハーベスト社

2019年に出版された戯曲集。舞台は和歌山の新宮。明治後期、洋行帰りの大石ドクトルが正しい食事の摂り方を地元で披露していく。脚気で陸軍の足を引っ張った森鷗外とは対照的に、彼の栄養学は軍人を含め注目の的になる。米国留学後にインド(ここでのカーストの目撃が大石の運命を大きく左右する)を経由して、帰郷後に開いた「太平洋食堂」。この食堂から見える風景が面白い。牟婁(むろ)新報の管野スガやクリスチャンの沖野岩三郎、僧侶高木顕明、そして地元の名士が食卓を共にする。文化学院を創設する奇才西村伊作、血気盛んな成石兄弟も加わっていく。嶽本は遊郭をめぐる起きた騒動やポーツマス会議後の不穏な時代の新宮を見事に描き出す。顕明の娘の悲惨な運命も初めて知った。宮本研の戯曲『美しきものの伝説』の続編と言えるが、こっこのほうが断然すごい。

天皇組合

火野葦平
河出書房新社

800 年程も前に順徳天皇が佐渡に流されたが、その子孫も含め、第二次大戦後、皇統の是正を叫ぶ「天皇」が次々と現れた。2019 年に再版された本書で中心に語られるのが北九州の小倉。小倉は筑豊炭坑の積み出し港であった若松、八幡鉄工所のある戸畑、そして下関の彦島（作家高史明の生地）にはさまれたエリアだ。火野はこの地域の様子を描きながら小倉の天皇を追いかける。戦後、公職追放された時期に、こんな奇妙な小説を執筆していたとは。闇市時代から 50 年代にかけての零落した雰囲気味わうには、やはり葦平や清張が良い。

治天之君/追憶のアリラン

古川健
ハヤカワ演劇文庫

最初の戯曲「治天之君」は大正天皇を主人公にしている。妻節子（さだこ）の名前はハンセン病関係で著名だが、この天皇のことはよく知らなかった。戦前ながら 4 度も病状報告が新聞に出され、顔写真も新聞に掲載された天皇。大正 10 年に「摂政」という幻の職が再登場していたこと、その直前に暗殺された原敬や宮内大臣とのからみ、無気味な時代だったことがよく伝わる。大正天皇の誕生日が知られていないのはなぜか。2 作目の「追憶のアリラン」は戦争末期、平壤で地方検事だった男の回想という形式。戦後まで現地に残ったことでシベリア送りが決まったかに思えたが、主人公は帰国できることになる。現地でのキリスト者弾圧に関わった男が、帰国後に対岸の朝鮮戦争を見つめる設定は秀逸。

日本統治期台湾文学集成 30 吳濁流作品集

吳濁流
緑蔭書房

本学の図書館にある本。収録された小説「ボツダム科長」は、第二次大戦直後の台北をありありと伝えてくれる。物語は、台北で暮らす女性が戦争末期に大陸から台湾へと逃げ込んでくる男と出会うところから始まる。男は漢奸（親日派）として処罰されることを怖れているが、主人公の女性はこの男に「祖国」や「祖語」（北京語）への憧憬を投影する。この憧憬が現実と齟齬を来す、二・二八事件が迫り来るという設定。吳濁流の小説、エッセイはどれも尽きせぬ魅力がつまっている。代表作『アジアの孤児』の初出版『胡志明』も本書に入っている。

トリニティ、トリニティ、トリニティ

小林エリカ
集英社

オリンピックを翌年（2020年）にひかえた2019年3月、文芸誌「すばる」の表紙にトリニティという言葉が踊った。黄色く縁取りされた枠の中でトリニティという単語が3つ縦に並ぶという印象的な表紙。その半年後に出版された本書は『マダム・キュリーと朝食を』（2014）を書いた若手小説家の続編だ。米国東部で暮らしながら、小林はキュリー夫人の伝記を読み込み、関連書籍を渉猟しながら執筆を続けたようだ。キュリー夫人とオリンピックを交差させる試みが面白い。今の時代に「トリニティ」という言葉に取り憑かれる作家が出てくるとは、思いもよらなかった。

アリランの歌

ニム・ウエールズ
松平いを子訳
岩波文庫

姜信子訳の『長江日記』に始まり、『永遠なる臨時政府』、『ウジヨとソナ』と相次いで朝鮮独立運動の本が出版された 2020 年。金九の自伝『白凡逸史』と同じく、忘れられないのが『アリランの歌』（1941）だ。著者の米国人ジャーナリスト、ニム・ウエールズは、この頃、『中国の赤い星』で知られるエドガー・スノーの妻だった。中国で出会った「キム・サン」という初老男性が運動に捧げた人生を伝える本書からは、東アジアの時代のうねりが感じられる。『白凡』にも言えるが、訳者・解説者の綿密な注解ありがたい。3 月には半世紀ぶりに原著、Song of Arirang が再版される。

いやな感じ

高見順
共和国

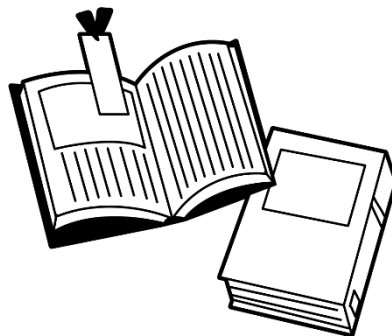
2019 年に再版された奇書。大正から昭和にかけて、マルクス主義とアナキズムを信奉する者同士が衝突し、弾圧を経て愚連隊のようになっていく様子が生き生きと描かれる。革命を志した者が虚無主義に陥り、エネルギーを持てあます様は激烈だ。彼らは「大陸」に渡って憤死したり、「満州」・上海でマフィアの如く暗躍する。五・一五事件の青年将校と交わるなど、自由民権運動の流れも汲むヒロイズムが、昭和初期のアナキストに引き継がれていたとは。奇天烈でエログロ、隠語あふれる本書は、中上健次の『日輪の翼』の先輩格にあたるのではと思う。

ソーシャルワークはマイノリティをどう捉えてきたのか —制度的人種差別とアメリカ社会福祉史

西崎緑
勁草書房

著者はアメリカ黒人史とジェンダーの専門で、かつ社会福祉学で博士号を持ち、日本でソーシャルワーカーを養成する教育機関に勤務してきた。長年コツコツと積み上げてこられた研究の成果として昨年、本著を出版されたが、ちょうど BLM が高まりをみせ、「制度的人種差別」(institutional/systemic racism) の議論が注目される中で、非常に重要な研究であるので、ここで紹介したい。日本で、アメリカのことが報道される時、まずはリーダーのことであったり、華やかなセレブの動向であったり、政治・経済状況であったりなど、いわゆる「大文字」の語りの部分が大半を占めることが多い。この本は、ソーシャルワークの現場から、社会の底辺の人びとの歴史を捉えた上で、アメリカ社会が福祉を通してどのように「人種」と向き合ってきたのかを考察するために「小文字」の語りを多くとり入れている。著者によれば、日本の社会福祉政策は、「ソーシャルワーク先進国」アメリカの影響を受けてきた。しかし、そこに存在する「救貧」へのまなざしや「福祉国家建設」という言説のもと、覆い隠されてきたものは何であったのか。BLM へ熱い視線が集まっている昨今だからこそ、本書を手にとって考えてみる意義があるのではないだろうか。

(本学図書館に所蔵されています)



「関さんの森」の軌跡

—市民が育む里山が地球を救う

関啓子
新評論

関啓子先生は、一橋大学の女性で初めて博士号を取得した方で、教育学専門で現在は一橋大学名誉教授です。元々の研究はソ連のレーニンの妻であるクループスカヤの教育思想で、その後、環境教育、多文化教育、比較教育学、教育の社会史などの分野の多数の研究書やテキストを出版されました。現在はアムールトラの研究をされています。私は、この先生から教育学を学びました。大学院で先生のゼミに所属させていただいた初めのころ、同じゼミ生が、「松戸といえば、葉のマツモトキヨシか、関先生のご自宅なんだぞ、知っているか？」と聞いてきました。なんだかよくわからないけど、関先生は資産家なんだな、という印象を持ちました。この先生の自宅が、本書の「関さんの森」です。東京ドームの何倍もあるという敷地には貴重な古文書の蔵があったり、地元の小中学生が課外活動する里山があったり、生物多様性も確認されており、環境教育の一環であるピオトープもあります。県民が頻繁に訪れる活動や憩いの場であり、環境保護において著名な研究者であるレスター・ブラウンも訪れています。その「森」を、行政による道路開発の目的で環境破壊しようとしたことに対して、市民が立ち上がったプロセスが本書に記録されています。市による土地の強制収容に、県の教育委員会を味方につけて「関さんの森を育む会」が抵抗しました。「森」は「共有財産」であり「対立は公共性をめぐる闘いであり、単なる抵抗運動ではなく政策提言であり、自然との共存を目指す文化運動でもある」と述べられているように、実際に、妥協はしなければならなかったものの、市民による道路変更案を実現させる成果を得ました。（実は私も「関さんの森を育む会」の会員で、初期の集会には新潟から出席しました。）冒頭で、現在、関先生はアムールトラの研究をされていると紹介しましたが、アムールトラの生態系を見ていくことで、自然環境や、人間・経済中心主義による開発の末路について考察することができるようです。未来の子どもたちのために、少しでもよい環境を整え、残すことに尽力されてきた先生による、このノンフィクションを一人でも多くの方に読んでいただきたいと思い、紹介いたします。

ハリエット・タブマン

—「モーゼ」と呼ばれた黒人女性

上杉忍
新曜社

奴隷解放者といって、はじめにアブラハム・リンカン（リンカーンではないです、念のため）を思い浮かべる人は多いと思います。実際にはリンカンが奴隷制の拡張に反対しただけ（このような人々を反奴隷制主義者といいます）であって、奴隷制廃止主義ではありませんでしたから、真の奴隷解放者は誰かという議論のなかで、リンカンは候補にはなるものの、該当者ではないというのが、この分野の専門家たちの見解です。さて、ハリエット・タブマンは、真の奴隷解放者であることは間違いないといえます。本人が元奴隷であり、奴隷制下の人びとの絶望を自身も味わってきて、家族や友人を救うために、奴隷制から北部自由州へ奴隷たちを逃亡させる「地下鉄道」というネットワークの「車掌」として生命の危険を承知の上で活躍しました。その功績と勇気が讃えられて、オバマ政権時に、新たな20ドル札の顔になることが決定したものの、それに不満のトランプによって、差し止められていました。本来は、女性参政権獲得の100周年記念にあたる昨年（2020年）に、20ドル札の刷新が行われるはずだったのですが、財務省によって延期が発表されていました。今年1月のバイデン政権誕生によって、延期されていたタブマンの20ドル札を直ちに発行することが先日発表されましたので、ついにタブマンの肖像画をお札でみるができるようになる日がそこまできました。私は、本当は、このタブマンや「地下鉄道」の研究をおこないたくて大学院へ進学したのですが、秘密裏におこなわれた地下のネットワーク組織であったために、資料が限られていて、とにかく資料を重視する歴史研究ではむずかしいと思い、研究対象を修正していました。上杉忍先生は、黒人史の大家であって、このむずかしい研究対象に10年間取り組まれた成果として、一般にもとてもわかりやすい語り口調でタブマンと彼女の生きた社会のストーリーを伝えていきます。なぜ、タブマンが「モーゼ」と呼ばれたのか。国民的英雄をめぐる、どのような「抗争」があるのか。晩年、自身も貧困と闘いながらもなぜ最後まで弱者救済のためのセツルメント活動（社会福祉活動）に携わったのか。これらの問いについて、タブマンの生涯を学びながら深く考えることができる魅力的なこの歴史本をおすすめします（昨年、映画『ハリエット』も上映されましたが、同じく上杉忍先生が監訳されていました。こちらも機会があればおすすめです。）

私とあなたのあいだ

—いま、この国で生きるということ

温又柔、木村友祐
明石書店

帯に、「——この世界、まっとうですか?」とあります。お世話になっている編集者の方が力を入れて編まれて、昨年(2020年)発行された書籍であるので、予約購入して手に入れたのですが、本を開いた途端、「対話」がはじまりました。現在売れっ子の受賞作家お二人の往復書簡なのですが、いま、この国で生きる読者の心の内奥に芸術、政治、アイデンティティ、インターネット社会、ジェンダー、生きものとの関係性などについて深く鋭く問いかけてきます。各章のタイトルは、「声と言葉のあいだ」「動物とヒトのあいだ」「持てる者と持たざる者のあいだ」「文学と社会のあいだ」「性と性のあいだ」「国家と家族のあいだ」「リアルとバーチャルのあいだ」「いま、この国で生きるということ」。わたしの中ではじまった「対話」を、学生たちともおこないたいので、もしかしたら、この本を何かの授業のテキストにしてしまうかもしれません。それくらい、みなさんに手にとってもらいたい一冊です。(ちなみに、表紙は黒地に猫2匹のセンスのよい可愛らしいデザインです。)

ショック・ドクトリン

—惨事便乗型資本主義の正体を暴く 上・下

ナオミ・クライン
幾島幸子・村上由見子訳
岩波書店

今年、本当にオリンピックは開催されるのでしょうか。みなさんはどう思いますか?きっと様々な意見があることでしょう。本書は2011年刊行ですから少し古いかもしれませんが、著者のクラインさんは、独立系メディアのDemocracy Nowに頻りに登場するジャーナリストであり、現在でもコロナ・パンデミックなどに関して積極的に発言されています。Democracy Nowは、私は英語の授業で教材として使うことがあります。オンラインで誰でも無料で視聴することができます。この本では、「惨事便乗型」資本主義を考察していますが、オリンピック開催の是非を考えるにあたり、この本をヒントに「祝祭便乗型」資本主義について各自考えてみたらよいのではと思います、おすすめする一冊です。

ジェンダーについて大学生が真剣に考えてみた —あなたがあなたらしくいられるための 29 問

一橋大学社会学部佐藤文香ゼミ生一同
佐藤文香監修
明石書店

ジェンダーについて学ぶ機会がなかったという方もいるかもしれません。先日、森氏が五輪組織委員会の会長職を、その女性蔑視の発言によって、国際社会からも強い批判を受けたことにより辞職せざるを得なくなった経緯をみて、ますますジェンダーの「いろは」を学ばなければと必要性を感じている方もいるかもしれません。それから、何となく大学でジェンダーについて学んだ気がするけれど、それを家族や友人に伝えようとするとうまく言葉が見つからないという方もいるかもしれません。理由ははっきりわからないけれど、テレビのワイドショーやドラマとか YouTube など、男女別の役割について「～あるべき」などという発言を聞くと「もやもや」するという方もいるかもしれません。これらすべての方がたに、本書をおすすめします。（本心は、日本語を読める方々全員におすすめしたいです。）ジェンダー関連の書籍はいま巷の書店であふれていますが、この本は基本的なことを網羅的にカバーしているだけでなく、ディスカッションポイントについてもわかりやすく提示されています。素朴な質問が実は本質をついているというのはよくあることで、それらに一生懸命応えようとするゼミ生たちの飾らない言葉と問題に向き合う真摯な姿勢に、さらなる問いや議論のためのヒントがたくさんつまっています。本書はサイズが小さめで、バッグにもするりと収まるので、私は本書を持ち歩いて、銀行や病院の待ち時間に読みました。この本から学んだ視点を用いて、日本社会を見てみると、その構造を支える様々なイデオロギーについて自己分析できるようになると思います。読んで、自分を取り巻く社会・文化・構造を理解すれば、それらに縛られないで、「あなたがあなたらしくいられるための」方途を見出すことができるかもしれません。

環状島＝トラウマの地政学

宮地尚子
みすず書房

2018年に新装版が発行された本書を、私は2020年に初めて読み、あまりにおもしろくて途中でやめられず、一気に読破した。おそらく、研究をおこなう誰もが避けて通れない問いの一つに「ポジショナリティ」（立場性）があろう。研究対象と研究者としての「私」の関係性を問われた時、「私」が当事者でない場合には、この説明は容易でないことが多い。研究の意義、社会貢献度、倫理などと併せて問われるとなおさら、説明のための「言葉」を見つける作業は簡単ではない。研究においてこれは、最も困難であって、かつ重要なプロセスかもしれない。著者は、精神科医師であり、同時に文化精神医学、医療人類学の研究者であり、本書では「トラウマ」への社会の向き合い方を「環状島」の例えを用いて分析している。トラウマの被害者（つまり、当事者）でない、「支援者」が「島」のどのような場所に位置づいているのか、島の外側である外海（潜在的「敵」や傍観者や無知・無関心者）との関係の中で何が起きているのか、何が可能なのかについて、セクシュアル・ハラスメント、FGM研究、アイデンティティ論等の事例をとりあげて考察している。もちろん、著者が対象として扱っているのは、DVや性暴力など一般に個人の「私的な問題」とされがちなトラウマだけではなく、戦争やホロコースト、奴隷制度、植民地化、自然災害など歴史上の集団のトラウマも含んでいる。かつて、ガヤトリ・スピヴァクがサバルタンの語ることの困難を論じたように、トラウマの当事者の声を聴くことは何重にも困難である。

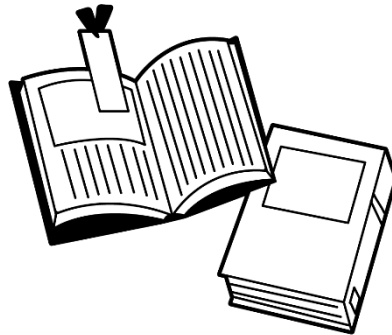
しかし、絶望に近い壮絶な現場でたくさんの患者に寄り添ってきた医師でもある著者の言葉は、次のように希望に満ちている。「環状島は、声の出せない人、抹殺された人を想像しようとする。（中略）声を出せない当事者はどこにいるかわからない。見えないもの、知らないことに想像を働かせるとき、そこには補助線が必要になる。さもないと想像自体が、見えないものに対する暴力となりうる。（内海）を想像するためには、声の出せる人や、その証言から補助線をひくことができる。そういう意味ではすべての証言は代弁で（も）ある。つまり、証言は証言そのものとして尊重され深く受けとめられるべきであるとともに、より内側にいる犠牲者の代弁としても理解され深く受けとめられるべきである。声をあげつづける人たちへの敬意と、声をあげられない人たちへの想像は両立するはずである。」そして、アボリジニーが「真実」をドリーミングという行為（「欠けた月の静かにゆらめく暗い部分を見ること」）によって体得する譬えをとりあげつつ、「発話する当事者に敬意を払うとともに、その内側につねに影が存在すること、感受されるべき沈黙が存在することを想像してみたい。発話そのものに敬意を払うとともに、それでも語られずにいること、表現されえない何かが存在することを想像してみたい。そういった受けとめ方や聞き方、たたずまい方を体得していきたい」と、「支援者」のあるべき姿を自らの決意表明のような形で綴っている。本書は、トラウマの被害者に寄り添って日々たたかっている支援者へのエールでもある。

（本学図書館に所蔵されています）

塩狩峠

三浦綾子
新潮文庫

旭川から国道 40 号線を北上すると、比布を過ぎたあたりで、峠道となる。塩狩峠である。峠を下ると和寒で、そのまま北に向かうと、名寄を経由して稚内に至る。標高 300 メートルに満たない小さな峠であり、車で通り過ぎるとあっという間で、日勝峠や狩勝峠のような北海道の雄大な峠を想像するとちょっと肩透かしにあった感じである。明治末年、この塩狩峠で一人の青年が自らの命を犠牲にして多数の乗客の命を救った鉄道事故があった。本書は、その史実に想を得て執筆された三浦文学の佳品である。律動感あふれる清廉な文体で描かれる主人公永野信夫の愛と信仰の生涯は、読む人の心のなかに時代をこえて受け継がれる確かな道標と深い余情を残す。とりわけ、信夫とその妻となるふじ子の純愛は、可憐かつ哀切で、人の世の幸福とは何かを思わず誰ともなく問いかけてしまう。北海道ローカル線の旅のお供にうってつけの一冊として推薦したい。



ボブという名のストリート・キャット

ジェームズ・ポーエン

翻訳 服部京子

辰巳出版

薬物中毒でホームレスの若者と野良猫の出会いの物語。支えあいながら、制度につながり、支援につながって、ゆっくり元気になっていく。どんなところからでもだれでも立ち直れるということが描かれています。実際に日本でも、ホームレスの人が路上で販売している「ビッグイシュー」という雑誌が取り上げられています。研究室にバックナンバーがけっこうあるので、読みたい人はぜひ。389号はこの猫のボブが表紙です。支援を必要としているその人のこと、その人の思いを想像することの大切さを教えてくれます。

むこう岸

安田夏菜

講談社

主人公は中学生の2人。私立の進学校をドロップアウトした山ノ内と生活保護世帯で病気の母と保育園に通う妹を支える瑞希。私たちの身近にある貧困について意識させられます。貧困問題の背景、貧困が生活に与える影響、貧困を生み出す社会の一員として自分自身がいることを考えられると思います。瑞希の背中を押すために、制度を詳しく知って、武器としてそれを使おうとする山ノ内。必死に調べて手に取ったのが、生活保護ケースワーカーの実施要領である「生活保護手帳」（これは千ページにも及ぶ辞書のようなもの）。その山ノ内のまっすぐさととても愛おしく感じました。

特集

小さな幸せ、

ささやかな夢

路面電車すごろく散歩

鈴木さちこ

木楽舎・翼の王国 books(2014)

電車に乗っていると幸せです。特に、ノロノロの電車がいいです。シンカンセンは感心センのです。

2014年当時に全国で21路線あった路面電車を双六に見立てて、お散歩しようという本です。ANAの国内線の飛行機で配られている『翼の王国』に連載されていた記事をまとめました。絵も写真もカワイイです。

出版された2014年から7年たって、路面電車の事情も変わってきました。この本では、札幌市電が西四丁目―すすきの間となっていますが、札幌駅前通りの250mくらいがつながって、環状運転を始めました。2015年のことです。富山に三つあった路面電車のうち、富山駅を挟んで海側の富山ライトレールと市内側の富山地方鉄道軌道線（富山の人には「市電」と言うんだそうですが）の二つは、富山駅の新幹線開通にともなって、駅全体が高架線になったため、駅の下をくぐってつなげることが可能になりました。それで、二つの路面電車は、線路がつながっただけではなくて、会社も合併することになりました。これで全国の21路線はが20路線になったわけです。でも、今、宇都宮でライトレールの計画が進んでいますから、もう少しするとまた21路線に戻るでしょう。

昔は新潟にも路面電車が走っていました。今の市役所のところに昔は県庁があって、県庁の庁舎と白山神社の間の、今は公衆トイレがあるあたりに「県庁前」の駅があり、そこから東関屋までが路面電車、そこから先、弥彦線の燕の駅までは専用軌道が走っていました。このうち、県庁前から東関屋までの路面電車区間が廃止されたのは1992年のこと。翌年には月潟―燕間が廃止され、1999年には残りの区間も含む全線が廃止されてしまいました。残念なことです。平成の大合併まで残っていたら、新潟市西部の重要な交通機関になっていたはずです。かくて、私の小さな幸せが消えてしまいました。無念！

分解者たち—見沼たんぼのほとりを生きる

猪瀬浩平
写真・森田友希
生活書院

埼玉県「見沼たんぼ」での暮らしを描いた2019年の本。見沼はもともと低湿地帯で、台風の際には洪水被害を抑え、東京の食料庫であった地域。戦後からバブル期にかけて、都心部における人口集中のあおりを受けるようになる。迫り来る「弊害」をダンゴロムシのように分解する者たちが、本書の主人公だ。障害者福祉と教育、そして農業をつなげて考える人々の、まばゆいばかりの生活記録。虫も水も、みな支えあって協働する世界が埼玉の片隅で守られてきたなんて。それだけに、障害者を「家の奥にしまおう」（隔離する）社会をつくってきたことを顧みずにはいられない。ダンゴロムシのように生きるという夢が芽生えた本。

魯肉飯のさえずり

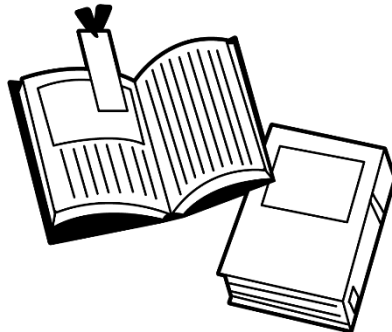
温又柔
中央公論新社

2020年の夏に出版された本。読みはじめてすぐ、女池のスタバ近くにある魯肉飯(ロバブン)を食べられるお店に向かった。飲茶も選べる素敵な定食、麺類やちまきに目移りするも、「ルーローファン」とふりがなのついた魯肉飯と水餃子のセットを注文した。幸せを実感した瞬間だ。これまでに読んだ温又柔(おんゆうじゅう)の小説では、一番のお気に入り。気づくと主人公を応援しながら読んでいた。コロナが収まったら台湾に行きたい。昨秋には、『幼な子の聖戦』で芥川賞候補になった木村友祐さんとの往復書簡からなる『私とあなたのあいだ』も出た。この2人はずっと追いかけていきたい。

サガレン 樺太／サハリン 境界を旅する

梯久美子
KADOKAWA

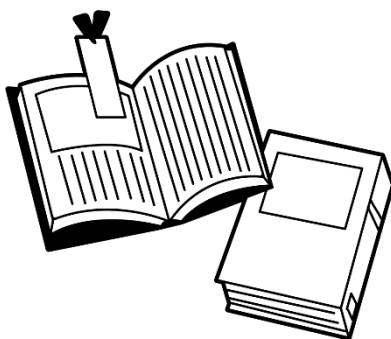
コロナで身動きが取れないとき、ありきたりだろうが、旅行記を読んで小さな幸せを感じていた。昨年の春に出版されたこの本はサハリンを巡る紀行文。作者の梯さんが鉄道マニアだとは知らなかった。鉄路の写真も何枚か収められている。20世紀になり日本とロシアが支配を争ったこの巨大な島を、チェーホフや宮澤賢治が訪れていた。昭和初期に林芙美子が先住民の特別居留区「オタスの杜」を訪れていたなんてビックリだ。寝台列車に乗って廃線をたどる旅はまだピンとこないが、稚内から40数キロで行ける「銀河鉄道」ゆかりの地、サハリンにはいつか行ってみたい。



坊ちゃん

夏目漱石
岩波書店・岩波文庫

定番かもしれませんが、既成の権力・権威をもつ人々に立ち向かってやっつけたりやり込められたりする話で、世の中うまくいくこともあるしうまくいかないこともあるということを、時代を隔てても感じさせてくれる小説です。深く読み込めばもっともっというろいろなことを考えさせてくれるという点では、『三四郎』その他の作品と同様で、やっぱり文学史上に残る大作家の凄みを垣間見ることができます（垣間見ることしかできないのがつらいところでもあります）。



雪の練習生

多和田葉子
新潮文庫

おもしろい本を読んで時間を忘れるのは、大きくないけれど深いしあわせです。社会主義時代のソビエトでサーカスの花形だったホッキョクグマが手記を書いて文壇にデビューし、シベリアに送られそうになってドイツやカナダに亡命する、というお話を、しごく当たり前の出来事であるかのように楽しく読ませるなんて、離れ業というほかありませんが、読者としては、こんな鮮やかな技を作者にかけられて、まさかさまに宙を飛ぶのも幸せです。(格闘技と違って、落ちても痛くありませんから。) 著者の母語は日本語ですが、ドイツ語でも作品を発表し、高い評価を得ていることは周知のとおりです。ドイツ語をちゃんと勉強して、ドイツ語で書かれた作品も読んでみたい、というのは、夢というよりは野望(無謀?) でしょうか・・・。

2020 年度卒業・2021 年度入学記念

どこでもドアのかぎ 2021

新潟県立大学生活協同組合

教職員フォーラム 「どこでもドアのかぎ」編集委員会 編

バックナンバーURL:<http://www.unii.ac.jp/~ktcoop/dokodemo.html>

表紙イラスト 小林 日向

2021年3月19日 発行